平和な心をもつことで

八重瀬町立具志頭中学校三年 浦崎 早未

「今日も平和な心でいられるさあ」

ひいおばあが私たちに会うたびに口にする言葉だ。少し離れた場所に住む私たち家族がひいおばあに会う機会はその多くない。けれど、普段の会話や授業で「平和」という言葉を耳にすると同時にあの口癖を思い出す。

今から四年前、ひいおばあは亡くなった。泣くことはなかったけど、もっと会ってしゃべっておけばよかったなと少し後悔があった。

学校で行われる沖縄戦についての平和授業では「平和とはどんなことか」という問いかけが多かった。私は毎回「戦争がないこと」と答えていたと思う。沖縄戦の授業もあって一番平和としてイメージしやすかったし、戦争体験者の動画では、戦争がない今と当時を比べて今は平和だと表現する人や戦争なんて二度と起こすべきではないとうったえる人が多かったから。だけど、ひいおばあにきいた「平和な心」の意味とは違っていた。

ひいおばあは「平和な心」を何も欲しがらず、自分以外の人を思いやれる心そんな余裕のある心という意味で使っていたらしい。

ひいおばあが体験した沖縄戦では食料、ベッド、布など常に何かを欲しがって、自分も周りの人も自分のことではいっぱいだったと。もちろん、ひいおばあにとっても戦争がないことが平和だと言っていた。けれど、戦争が終わっても差別や苦しい生活は続いて、生きていくためにお金を欲しがって自分のことではいっぱいで、まるで沖縄戦と似た状況が続いていた。ひいおばあはその当時のことをあまり思い出したくない様子だった。子だっただけでほしいと私たちに話してきてくれた。小学生のときにきいたのひいおばあの話としぐさに理解できないこともあったが今だからわかることもある。

ひいおばあが沖縄戦の話をするたびに毎回でるしぐさがある。私とは目をあわせず、

海のある方を見るといしぐさだ。きっと、今の美しくみえる青色に沖縄戦当時のあかららしい波にのってくる黒い煙を見ていたんだと思う。海を見て手をあわせるしぐさも海にかえった家族と故郷の伊江島を想ったことだと思った。その時に思うことがある。もしかしたら、ひいおばあはまだ「平和な心」をずっともっているわけではないのかもしれない。ひいおばあは沖縄戦で失ったものをずっと欲しがっている。家族も家もなにもかも、ずっととあきらめられていない。今になって気づいてもおそい。ひいおばあが思い出したくないことを会うたびに伝えてきたのは、これから生きる私たちが「平和な心」をもち続けるための環境を自分の力でつくる手がかりになってほしいから。私たちが愛するものを失ってほしくないから。今になってわかることがすごく悔しい。もっと、たくさんひいおばあに会いに行くべきだったんだ。

ひいおばあは告別式、ひいおばあはたくさんの人に囲まれていた。知っている人、知らない人、泣きすぎて目がはれている人、静かな人。それぞれひいおばあに対する想いのつよさ、思い出のこさは違っているかもしれない。でも、ここにいる全員がひいおばあが大好きで尊敬していることは変わらない。

最後に見たひいおばあはたくさんのお花に囲まれてねむっていた。

私はひいおばあが伝えてくれたことを大切にしてくさんの人に伝えたい。「平和な心」をもって生きたい。とひいおばあに手をあわせ最後のお別れをしていたとき、おばあが私の肩をよせて言った「ありがとうね」と。きっとおばあの方がひいおばあから話をきいている。だから私よりも、たくさんのおばあのことを知ってそれを大切に生きてきたんだ。私は息をのんでこたえた。

「平和な心でいよう」

私たちが「平和な心」をもつことで自分自身と向き合い、助け合える環境がつかれる。私はそう思う。